

接触経験が少ない日本語母語話者は 会話を通してどのように非母語話者の 日本語レベルを判断しているか

張 瀟尹

◆要旨

コミュニケーションを円滑に進めるため、母語話者は非母語話者の言語能力に応じて調整を行う必要がある。しかし、言語能力に応じた調整を行うには非母語話者の日本語レベルを判断する必要がある。このような判断は日本語教師にとっては比較的容易であるが、接触経験が少ない母語話者はどのように判断しているのだろうか。そこで本稿は、接触経験が少ない母語話者の判断基準を分析した。その結果、【相手の観察に基づいた判断】、【自己内省に基づいた判断】、【会話全体を通じた判断】が抽出され、接触経験が少ない母語話者は非母語話者の会話時の様子、自身の会話時の感覚、会話のスムーズさなどに注目し、非母語話者の日本語レベルを判断していることが分かった。

◆キーワード

接触場面、接触経験、
日本語レベルの判断基準、母語話者の評価、
意識的配慮、コミュニケーション方略

◆ABSTRACT

Native speakers often improvise to adjust their utterances in interactions with non-native speakers (NNS), and it is necessary to judge the performance levels of NNS before making those adjustments. The different approaches in judging a NNS may come as second nature to someone who interacts with them on a regular basis, but how does a native speaker with little experience in contact situations (NSN)? In this paper, I analyze the judgment criteria of NSN. Specifically, "judgments based on observation of NNS", "judgments based on self-reflection" and "judgments based on the conversation" are extracted. NSN tends to judge the performance levels of NNS by paying attention to NNS' facial expressions and reactions, their own utterance and sensation, and the smoothness of the conversation.

◆KEY WORDS

contact situations, experiences in contact situations, judgment criteria of the Japanese performance level, native speakers' evaluation, conscious consideration, communication strategies

How Native Japanese Speakers with Little Experience in Contact Situations Judge the Japanese Language Performance Levels of Non-native Speakers through Conversations

XIAOYIN ZHANG

1 はじめに

接触場面において、母語話者には非母語話者の言語能力に応じた適切な言語調整が求められる(筒井2010)。特に日本語能力が十分でない非母語話者を対象とする際には、母語話者側が言語調整を行わないと会話がうまく進まない。しかし、調整を行うか行わないか、どのような調整を行うかを定めるためには相手の日本語レベルを判断する必要がある。日本語教育の専門知識を持っている日本語教師は非母語話者の日本語レベルに応じて意識的配慮を行ったり、言語行動を調整したりすることができる(一二三1999)が、日本語教育の知識や教授経験を持っていない母語話者は、会話を通してどのように非母語話者の日本語レベルを判断しているのだろうか。

また、日本語教育の知識や教授経験を持たない母語話者にも接触経験が多い者、少ない者がいる。村上(1997)、柳田(2015)は非母語話者との接触経験の多寡によって母語話者が使用するコミュニケーション方略に違いが見られることを明らかにしているが、非母語話者との接触経験が母語話者の言語行動に影響を与えるならば、接触経験が異なる母語話者が非母語話者と会話をする際に持つ意識にも差があるはずである。

そこで本稿は、接触経験が少ない母語話者に着目し、彼らが非母語話者との会話において何に注目し、どのように非母語話者の日本語レベルを判断しているのか、そして、その判断に影響を与える要因は何かを明らかにする。

2 先行研究と本稿の立場

2.1 母語話者の接触経験と母語話者の意識に関する研究

Eisenstein(1983)は、母語話者の非母語話者に対する評価に影響を及ぼす要因の一つとして非母語話者と接触する機会を挙げている。小池(1999)は日本語教師と日本語教育に携わったことがない一般母語話者の評価観点を比較するため、2名の日本語教師と2名の一般母語話者に初級日本語学習者が行ったロ

ールプレイのビデオを視聴させ、学習者に対する印象をインタビューで確認した。その結果、日本語教師は非母語話者の文法能力、談話能力などに注目しているのに対し、一般母語話者は非母語話者の発話の聞き取りやすさと分かりやすさ、非言語表現などに注目していることが明らかになった。しかし、小池(1999)は一般母語話者の接触経験の差による比較は行っていない。

一方、渡部(2003)は初対面の母語話者と非母語話者の自由会話を収録し、収録したビデオを第三者の母語話者に見せ、第三者の母語話者が非母語話者の発話の評価する際に重視する観点を抽出し、評価尺度を作成した。渡部(2004)では一般母語話者を日常生活で学習者と日本語で接する機会別に5段階に分け、渡部(2003)で作った評価尺度を用いて、接触経験の差によって評価基準に対する母語話者の意識が異なるかを調べた。その結果、母語話者が重視する評価基準の度合いに非母語話者との接触経験の多寡はあまり関係がないとしている。しかし、渡部(2003,2004)で扱ったデータは全て第三者評価である。実際に会話に参加した当事者が評価を行う場合、会話当事者の接触経験によって非母語話者に与える評価や評価する際に重視する観点が異なる可能性も考えられる。

2.2 非母語話者の日本語レベルと母語話者の意識に関する研究

非母語話者の日本語レベルが母語話者の意識的配慮に与える影響について、一二三(1995)は日本語ボランティアを対象に意識調査を行い、経験が長い日本語ボランティアは初級レベルに対しては相手が会話に参加しやすいように情緒面での意識的配慮を行い、中上級レベルに対してはより深い理解を達成するために言語面・話題面での意識的配慮を行っていることを明らかにした。

また、一般母語話者について原田(2001)は非母語話者の日本語レベルが上がると、母語話者の評価基準が一つではなくなり、非母語話者に対する評価が厳しくなること、渡部(2005)は教師・非教師にかかわらず、日本語レベルが低い学習者に対しては「日本語」の評価は低い「親しみやすさ」と「積極性」に対して好印象を持つようになり、日本語レベルが高い学習者に対しては「日本語」の評価は高い「親しみやすさ」と「積極性」に対する評価が厳しくなることを指摘している。

さらに、渡部(2002)は日本人大学生と留学生の接触場面において母語話者

自身が意識的配慮を行った場合、非母語話者の日本語レベルに対する評価が下がり、逆に、母語話者が意識的配慮を行わなかった場合、評価が上がることを指摘している。以上の研究から、非母語話者の日本語レベルと母語話者の意識的配慮や評価は互いに影響し合う関係にあると言える。

2.3 本稿の立場

先行研究から、母語話者の接触経験によって非母語話者に対する評価が異なること、非母語話者の日本語レベルによって母語話者の意識的配慮や評価基準が異なることが明らかになっていると言える。しかし、渡部 (2002) で意識的配慮の有無が非母語話者の日本語レベルの判断に影響することが指摘されているものの、母語話者がどのように非母語話者の日本語レベルを判断しているかについては十分に明らかになっているとは言えない。したがって本稿では、接触経験が少ない母語話者に着目し、彼らが非母語話者との会話において何に注目し、どのように非母語話者の日本語レベルを判断しているか、そして、その判断に影響を与える要因は何かを明らかにする。

3 研究方法

3.1 調査協力者の属性

上記の目的を明らかにするため、接触経験が少ない母語話者 (Native Speaker Non-Experienced以下、NSN) に日本語レベルが異なる非母語話者と会話し、非母語話者の日本語レベルを比較してもらい調査を行った。調査協力者のうち、NSNは、柳田 (2015) の選定基準に基づいて外国人との日本語での接触がほとんどない母語話者4名 (nsN1 ~ nsN4) を選定した。非母語話者は、調査実施前に行ったACTFL-OPIの会話技能テストにおける判定結果に従って初級学習者群 (Non-native Speaker-Novice以下、NNS-N)、中級学習者群 (Non-native Speaker-Intermediate以下、NNS-I)、上級学習者群 (Non-native Speaker-Advanced以下、NNS-A)、4名ずつ、計12名 (nnsN1 ~ nnsN4, nnsI1 ~ nnsI4, nnsA1 ~ nnsA4) を選定した^[註1]。

また、母語話者の接触経験と非母語話者の日本語レベル以外の属性の影響を

排除するため、母語話者と非母語話者を面識がない初対面のペアにし、性別を女性、年齢を20代、属性を大学(院)生、非母語話者を中国人日本語学習者に限定した。さらに、順序効果による影響をコントロールするため、会話実施順を偏りがないように設定した。調査協力者の組み合わせと会話実施順は表1の通りで、1人のNSNはNNS-N、NNS-I、NNS-A各1名と1回ずつ会話をし、計12ペアの会話を収集した。

表1 調査協力者の組み合わせと会話実施順

ID	NNS-N	NNS-I	NNS-A	会話実施順
nsN1	nnsN1	nnsI1	nnsA1	nnsI1 → nnsN1 → nnsA1
nsN2	nnsN2	nnsI2	nnsA2	nnsA2 → nnsI2 → nnsN2
nsN3	nnsN3	nnsI3	nnsA3	nnsN3 → nnsA3 → nnsI3
nsN4	nnsN4	nnsI4	nnsA4	nnsI4 → nnsA4 → nnsN4

3.2 調査方法

会話の内容は、10分程度の雑談(自己紹介)と20分程度の「目的がある会話」(一二三1999)^[註2]である。「目的がある会話」では、「一泊二日の旅行計画」をトピックとした。また、会話の感想と会話相手の日本語レベルの判断基準を確認するため、毎回の会話の直後にNSNに感想シートを記入してもらった。感想シートは会話に対する印象、相手に対する印象、会話の良かった点や難しかった点、会話時に行った工夫や配慮などを自由に記述してもらった。さらに、3回目の会話の直後に、「会話の満足度」、非母語話者の「印象の良さ」、「日本語レベル」という三つの観点からそれぞれに1位から3位までの順位を付与してもらった。全3回の会話終了後に、調査協力者全員に1時間半から2時間半程度のフォローアップ・インタビュー(以下、FUI)を実施した。FUIでは、会話の映像を見ながら会話時の感想や感想シートに書かれた内容を確認した。また、非母語話者の日本語レベルについてNSNに「3人の会話相手の日本語レベルについてどう思うか」、「順位付けの理由は何か」、「どのように判断したか」、「会話のどの部分を見て判断したか」などを尋ねた。調査は2020年5月から8月にかけて、オンライン会議システムZoomにて実施し、全ての内容を録音、

接触経験が少ない日本語母語話者は会話を通してどのように非母語話者の日本語レベルを判断しているか

録画した。データの利用にあたっては、研究目的等を口頭および書面で説明し、匿名性を担保した上での研究利用および公開について了承を得ている。

3.3 分析データと分析方法

本稿で対象とするデータは、NSNが付けた非母語話者の「日本語レベル」の順位の結果、記入した感想シート及びNSNへのFUIの文字化資料である。NSNの判断基準について、感想シートとFUIの文字化データから非母語話者の日本語レベルに関する記述とコメントを全て抽出し、佐藤（2008）に従って以下の手順で定性的コーディングを行った。まず、対象データを精読し、非母語話者が使用した日本語、非母語話者の日本語能力に言及した内容を全てピックアップした。その後、抽出したデータを最小の纏りとして分割し、短い言葉や文章で要約した。要約された内容についてその文字テキストが全体として示す概念を検討し、小見出しとなるコードを付けた。さらに、内容の類似性からコード間の関係性を検討し、下位カテゴリー、中位カテゴリー、上位カテゴリーへと集約した。そして、NSNの判断基準を明らかにした上で、OPIテストの判定結果と一致したNSNの判断基準、OPIテストの判定結果と一致しなかったNSNの判断基準を比較し、両者の間にズレが生じた要因を探る。

4 NSNの非母語話者の日本語レベルに対する判断基準

NSNの記述とコメントを対象に定性的コーディングを行った結果、三つの上位カテゴリー（【】で示す）、六つの中位カテゴリー（《》で示す）、11個の下位カテゴリー（〈〉で示す）、27個のコード（〔〕で示す）が生成された。表2に全体のカテゴリーとコードの一覧、及びコードに当てはまる例を示す。さらに、コード右側の括弧に該当コードに言及した協力者のIDを入れて示す。以下、上位カテゴリー【相手の観察に基づいた判断】、【自己内省に基づいた判断】、【会話全体を通じた判断】及びその下位分類について、詳細を見ていく。

4.1 【相手の観察に基づいた判断】

【相手の観察に基づいた判断】は《相手の様子と反応の観察に基づいた判断》、

《相手発話の観察に基づいた判断》、《関連情報に基づいた判断》と大きく三つの中位カテゴリーによって構成される。

まず、《相手の様子と反応の観察に基づいた判断》はNSNが観察した非母語話者の会話時の表情や反応に関する〈会話時の相手の様子〉、及びその表情と反応から自分の発話がどの程度理解されたかを推測した〈相手の理解度〉が含まれる。そのうち、〈会話時の相手の様子〉は非母語話者のNSNの発話に対する〔理解困難な様子の有無〕、〔積極的な反応の有無〕、及び非母語話者が発話する際の〔発話困難な様子の有無〕、〔緊張の有無〕によって構成される。表2に挙げた例（4）から分かるように、NSNが話した内容に対して積極的に質問したり、興味を示したりした非母語話者に対してNSNは日本語レベルが高いと判断し、例（1）、（2）、（3）から分かるように、NSNの発話を理解していないように見えた非母語話者、発話時に言葉に詰まった非母語話者、緊張しているように見えた非母語話者に対してNSNは日本語レベルが低いという判断を下した。また、野原（2016）では非母語話者と会話する際に母語話者は相手が自分の発話を理解したかを重視することが指摘されているが、今回のデータからも類似した内容が見られた。〈相手の理解度〉は非母語話者が自分の発話に対して理解表明をしたか、どの程度理解したかに関する内容が含まれ、NSNの判断の観点となっていると言える。

二つ目の中位カテゴリーの《相手発話の観察に基づいた判断》は非母語話者の発話に着目したもので、〈相手発話のスムーズさ〉、〈語彙力〉、〈標準語と方言〉と大きく三つの下位カテゴリーが含まれる。〈相手発話のスムーズさ〉は六つのコードによって構成され、そのうち、〔中途終了の有無〕、〔短い文の量〕、〔発話の滑らかさ〕、〔発話前の考える時間の有無〕は非母語話者がどう話すかに注目したものである。収集したデータのうち、特にNSNの特徴がよく表れているのは〔中途終了の有無〕、〔短い文の量〕に関する語りである。まず、〔中途終了の有無〕は非母語話者が途中で発話をやめることがあったかどうかに関及したもので、例（7）は言い淀んだり、言い直したりしたnnsA2の発話を「引っ込める」と認識し、「nnsI2より日本語能力が低い」と判断したnsN2のコメントである。柳田（2015）は中途終了発話、言い淀み、沈黙、間などを「非母語話者の発話遂行困難表明」のサインとして挙げ、接触経験が少ない母語話者

表2 NSNによる非母語話者の日本語レベルの判断基準

上位	カテゴリー		コード	コメント・記述例	
	中位	下位			
相手の観察に基づいた判断	会話時の相手の様子	相手の様子と反応の観察	理解困難な様子の有無 (nsN4)	(1) (nmsI4の方が) ちよっと、日本語分かってなさそうだなあって思ってたのでゆっくり話しました。(nsN4)	
			発話困難な様子の有無 (nsN1)	(2) (nmsN1が) 言葉でちよっと会話に困るっていうのが、まあ、1と2位の方 (nmsII, nmsAI) は特になかったんですけど。(nsN1)	
			緊張の有無 (nsN2, nsN4)	(3) (nmsN4は) 最初の自己紹介の時にぎこちなかったっていう部分 (中略)、途切れ途切れ、短くて「。」が多かったので、ちよっと緊張しているかなあと思いました。(nsN4)	
			積極的な反応の有無 (nsN3)	(4) 結構相手 (nmsA3) も気になることがあったらすぐになんかこころ「それどういうことですか」とか話したりしてくださって、あー、興味を持って話して下さってるんだなあっていうことが伺えて、それもあって余計にテンポ良く話せたんだなあという感想になったのかと思います。(nsN3)	
			理解した合図の有無 (nsN1)	(5) 少なくともnmsI1との会話に関しては、もう全然、あの一、向こうが何言ってるのかわからないことではないし、こっちが言ったことにも、なんかそれまあ分かかってるんだらうなあっていう反応をしてくれたりには感じませんでした。(nsN1)	
			相手の理解度 (nsN2, nsN4)	(6) 一位のnmsA4の方が明らかに日本語が上手で、私が言ったことを全部理解して、私は別に考えなくても、この人にこう言う言ったら伝わるかなあとか考えなくても、話ができただけ相手なので、そういう部分ですかね。(nsN4)	
	相手発話のスムーズさ	相手発話の観察	中途終了の有無 (nsN2)	(7) (nmsA2は) こっちが意味を受け取る前に相手がそれを引込めちゃうこともあったので、nmsI2よりかは日本語能力が低いと思います。何か言葉を言いかけるとすれど、途中でやめちゃうような感じ。(nsN2)	
			短い文の量 (nsN4)	(8) 一行言って「。」、一行言って「。」ってところが多くて、例えば、普通だったら、○○大学に通ってる○○です。今日はえーっと、好きなことは○○で、得意なことは○○です。よろしくお願ひします。みたいな感じが、すごいスムーズな会話だと思ってるんですけど、nmsN4は、何とかです。何とかとかという名前です。東京にいます。何歳です。みたいな途切れ途切れ、短くて「。」が多かった。(nsN4)	
			発話の滑らかさ (nsN4)	(9) 3位のnmsN4は片言ブラス、さっき言った通り「。」が多い、「何とかです」、「何とかです」みたいな感じで、滑らかじゃないと思ったので3位にしました。(nsN4)	
			発話前の考える時間の有無 (nsN4)	(10) 2位のnmsI4は、ちよっと考えながら話してた部分があったので、考えずに話せたnmsA4の方が1位だなあと思います。(nsN4)	
			レスポンスの速さ (nsN3)	(11) (nmsA3の) 相槌とレスポンスに返ってくれた速度一番私の友人と話してる感覚と近かったからだと思います。(nsN3)	
			相槌の自然さ (nsN3)	(12) 一番大きかったのはやっぱり相槌が非常に多かったからというのがありますね。(nmsA3は) 結構「うん」とか、「あー、そうですね」とか、なんだろう、日本人のネイティブと話しているような自然な相槌だったからこそ余計にすごく安心して話すことができた。(nsN3)	
自己内省に基づいた判断	語彙力	自身の心情面の内省	ボキャブラリーの豊富さ (nsN3)	(13) (nmsI3の方が) こなれているボキャブラリーの数が多かったから。(nsN3)	
			ボキャブラリーの難易度 (nsN3)	(14) なんかないより難しいっていうか、あまり普通の日本人の方でも使わないっていうようなボキャブラリーとか、ご存知なのかなあという意味でちよっとnmsI3が一位に来てますね。(nsN3)	
			標準語と方言の使い分け (nsN4)	(15) nmsA4は大阪に住んで、本来関西弁で言うんですけど、関西弁を出してない。(中略) そういう標準語と関西弁を分かっていらっしやるので、日本語がすごく上手だなあという印象でした。(nsN4)	
			留学経験の有無 (nsN1)	(16) (nmsN1は) 留学も経験している二人 (nmsII と nmsAI) とはレベル差があったように感じた。(nsN1)	
			外国人と会話する感覚の有無 (nsN1)	(17) 何らかか不自由なく会話できました。nmsAIは非常に日本語が上手で、あまり外国人と喋ってる感じもなかったなあと思いますね。(nsN1)	
			ネイティブと会話する感覚の有無 (nsN3, nsN4)	(18) 彼女 (nmsA4) が話している日本語が、すごいネイティブっていうか、私の友達と話している感覚と似てたので、大丈夫だと思って (やさしい言葉を使わなくていい)、話しました。(nsN4)	
	会話時の感覚	相手の理解度	自己発話のスムーズさ	緊張の有無 (nsN3)	(19) 一番大きい要因だと、やっぱり (nmsA3の) 相槌とレスポンスに返ってくれた速度一番私の友人と話してる感覚と近かったからだと思います。一番リラックスして話せましたね。(nsN3)
				共感の有無 (nsN2)	(20) コロナで大変であるっていう自分がかう共感できる内容の会話をできた相手だったので、それはお互いに言いたいことが分かってるといように思うのがnmsI2です。(nsN2)
				相手発話に対する理解度 (nsN1, nsN2)	(21) 少なくとも1回目の会話に関しては、もう全然、あの一、向こう (nmsII) が何言ってるのかわからないこととていうのもないし。(nsN1)
				相手発話を理解する難しさ (nsN2)	(22) nmsN2と会話した時は私は私はずごくその何を言おうとしているんだらうというふうになんかぎゅって関心が向いていました。何を伝えようとしているのか他の2人 (nmsI2, nmsA2) に比べるの見え辛かった。(nsN2)
				自己発話のスムーズさ (nsN1, nsN3)	(23) ちよっとそもそも私自身も詰まってるどころがあったので、ということで (nmsN1を3位にした)。(nsN1)
				話し方の調整の有無 (nsN1, nsN4)	(24) 一つ前 (nmsN1) とか、もう一つ前 (nmsII) とかだと、(中略) やっぱちよっとこころ言葉伝わらなかつたら、こころ言い換えたりとか、まあそういう努力して。(nsN1)
会話全体に対する評価	会話全体に対する評価	会話全体に対する評価	ジェスチャーによる言葉の補充の有無 (nsN2)	(25) 私もなんで3回目の人 (nmsN2) が、完全にお互いが言ってることを理解してると思えないのに、(中略) 色んなジェスチャーとか加えたりして楽しかった。(nsN2)	
			会話全体のスムーズさ (nsN1)	(26) 何らかか不自由なく会話できました。nmsAIは非常に日本語が上手で、あまり外国人と喋ってる感じもなかったなあと思いますね。(nsN1)	
			意味疎通の程度 (nsN2)	(27) (nmsN2との会話) お互いに理解できなかったところが多かった。半分くらいあったと思う。(nsN2)	

より接触経験が多い母語話者の方が非母語話者の発話遂行困難を察知し積極的に援助を行う傾向があることを指摘している。例(7)から、nsN2はnnsA2の言い淀みを発話困難ではなく、「こっちが意味を受け取る前に相手がそれを引っ込めちゃう」として認識していることが分かった。また、[短い文の量]は非母語話者の発話文の長さに関する指摘で、例(8)は日本人の発話との違いを意識し、フィルター、複文が少なく単文を多く使用したnnsN4の発話を「途切れ途切れ、短くて、「。」が多い」と評価したnsN4の語りである。さらに、nsN4は短い文を多く使用することが[発話の滑らかさ]に影響することも指摘している(例(9))。これらの語りから、nsN4は非母語話者の発話を細かく観察していたことが窺える。一方、[レスポンスの速さ]、[相槌の自然さ]は非母語話者が聞き手になった際の返答や相槌、つまり、非母語話者がNSNの発話に対してどう反応するか注目したものである。例(11)、(12)では、非母語話者の自然な相槌と素早い反応から、NSNは非母語話者が自分の発話を理解したと感じ、非母語話者の日本語レベルを高く評価していると言える。〈相手発話のスムーズさ〉の他、NSNは非母語話者の〈語彙力〉にも注目している。例(14)は「より難しい」、「普通の日本人の方でも使わない」語彙を使用したnnsI3を1位と判断したnsN3の語りである。「nnsI3はなんかビジネスでお使いになるような日本語とかがお上手で、nnsA3はどちらかという日常生活、ご友人とかとされるというような時の日本語が特にお上手なのかなあ」は例(14)の続きである。この語りから分かるように、nsN3は日常会話で使われる語彙よりビジネスで使われる語彙の方が難易度が高く、それを使ったnnsI3の方が日本語レベルが高いと認識している。2人の非母語話者との会話(雑談)を確認したところ、調査時に就職活動を行っていたnnsI3との会話は専門的な話題が多く、オンライン授業を受けていたnnsA3との会話は身近な話題が多かった。しかし、OPIテストの判定結果によれば、nnsI3よりnnsA3の方が日本語レベルが高い。話題が専門的なnnsI3が高く評価されたことから、話題もnsN3の非母語話者の日本語レベルの判断に影響を与えていたと言える。最後に、〈標準語と方言〉に関するコメントも見られた。例(15)から分かるように、nsN4は[標準語と方言の使い分け]ができる非母語話者を「日本語がすごく上手」と判断していた。

三つ目の中位カテゴリーの《関連情報に基づいた判断》は非母語話者の「留学経験の有無」といった〈関連情報〉に関する内容である。NSNは、留学経験を持っていると話した非母語話者の方を日本語レベルがより高いと判断した。

4.2【自己内省に基づいた判断】

【自己内省に基づいた判断】は《自身の心情面の内省に基づいた判断》、《自己発話の内省に基づいた判断》という非母語話者と会話した際に生じた感覚やNSN自身の発話のスムーズさや会話時に行った工夫に関する内容を含む。

《自身の心情面の内省に基づいた判断》は〈会話時の感覚〉、〈相手発話に対する理解〉が含まれる。まず、NSNは非母語話者と会話した時に様々な感覚が生じ、その感覚が非母語話者の日本語レベルの判断にも影響を与えていた。例(17)、(18)から、NSNは「外国人と喋っている感じが無い」、「すごくネイティブ」などと感じると、非母語話者の日本語レベルが高いと判断していることが分かる。また、例(19)から、nsN3は、nnsA3の相槌と反応の速度が友人と会話する時の感覚に近かったため、リラックスして会話することができ、nnsA3の日本語レベルが高いと判断していることが分かる。さらに、例(20)から、nsN2は共通話題で会話が盛り上がり、共感できたため、nnsI2の日本語レベルに高い評価をしていることが分かる。一方、NSN自身が聞き手になった際に相手の発話をどの程度理解したかという〈相手発話に対する理解〉に関する言及もあった。例(22)から、nsN2にとって日本語レベルが異なる3人の非母語話者の発話を理解することの難易度が違うことが分かる。

さらに、NSNは自分がスムーズに発話できたか、発話時にどのような工夫をしたかという《自己発話の内省に基づいた判断》に関する内容にも言及した。例(23)は日本語レベルが低い非母語話者と会話する際に「発話が詰まった」と感じたnsN1のコメントである。一方、日本語レベルが高い非母語話者と会話する時に「テンポ良く話せた」というようなコメント(例(4))も得られた。これらのコメントから、NSNが非母語話者の日本語レベルを判断する際には、〈自己発話のスムーズさ〉が影響していると言える。そして、〈会話時に行った工夫〉は[話し方の調整の有無]、[ジェスチャーによる言葉の補充の有無]によって構成される。例(24)から意思疎通に問題が発生した際に言い換えなど

のストラテジーを使い、話し方を調整したnsN1、例(1)から理解困難な様子をした非母語話者に対し、話すスピードを調整したnsN4、例(25)から意思疎通に困難を感じた際にジェスチャーを使用したnsN2の姿が窺える。これらのコメントから、NSNは自分が話し方を調整するか否か、ジェスチャーを用いるか否かが相手の日本語レベルの判断に影響を与えていることが分かる。これは、渡部(2002)で指摘された、母語話者は意識的配慮を行う必要の有無によって非母語話者の日本語レベルの判断を変えるということと一致している。

4.3 【会話全体を通した判断】

最後に、非母語話者の日本語レベルを判断する際に、NSNは会話全体というマクロな視点も取り入れている。【会話全体を通した判断】は〈会話全体に対する評価〉に関する内容であり、非母語話者と2人で行ったやりとりがスムーズにできたかに向けられた[会話全体のスムーズさ]、及び非母語話者との意味疎通がどの程度できたかに向けられた[意思疎通の程度]によって構成される。

5 NSNが判断した順位と判断に影響を与える要因

5.1 NSNが判断した非母語話者の日本語レベルの順位

ここまで、NSNの非母語話者の日本語レベルの判断基準について分析してきた。本節ではこれらの判断基準を利用してNSNが判断した非母語話者の日本語レベルの順位の結果を述べる。表3はNSNが判断した3人の会話相手の日本語レベルの順位、及びOPIテストが判定した結果である。表3から分かるように、4人のうち1人はOPIテストが判定した結果と一致したが、その他の3人は一致しなかった。結果が一致しなかったnsN1、nsN2、nsN3の3名はいずれもOPIテストが初級と判定した学習者を3位としたものの、中級学習者を1位、上級学習者を2位とした。このように、OPIテストの判定結果と一致しなかったnsN1、nsN2、nsN3にとっては非母語話者3人の中の日本語レベルが最も低い非母語話者を判断することは容易であるが、非母語話者の日本語レベルが上がると、区別ができなくなり判断が難しくなることが窺える。

表3 NSNによる非母語話者の日本語レベルの順位とOPIテストの判定結果

	OPI	nsN1	nsN2	nsN3	nsN4
NNS-A	上級	2位	2位	2位	1位
NNS-I	中級	1位	1位	1位	2位
NNS-N	初級	3位	3位	3位	3位

5.2 nsN4とnsN1、nsN2、nsN3が重視する判断基準の比較

本項では、OPIテストの判定結果と一致したnsN4が重視する判断基準と、OPIテストの判定結果と一致しなかったnsN1、nsN2、nsN3が重視する判断基準の相違点を検討する。4人がそれぞれ表2のうち何種類のコードに言及したかについて、上位カテゴリー別に集計した結果を表4に示す。

表4 NSNが言及したコードの種類の上位カテゴリー別一覧

上位カテゴリー	nsN1	nsN2	nsN3	nsN4
【会話全体を通した判断】	1 (12.50%)	1 (12.50%)	0	0
【自己内省に基づいた判断】	4 (50.00%)	4 (50.00%)	3 (37.50%)	2 (22.22%)
【相手の観察に基づいた判断】	3 (37.50%)	3 (37.50%)	5 (62.50%)	7 (77.78%)
合計	8 (100.00%)	8 (100.00%)	8 (100.00%)	9 (100.00%)

()内は、合計に占める割合を表す

表4から、nsN1とnsN2は自身の感覚や自己発話のスムーズさを、nsN3とnsN4は非母語話者の発話や発話時の反応をより重視している傾向が見られる。このことから、nsN3とnsN4は同様の判断基準を持っているように思われるが、中位カテゴリーを確認したところ、nsN3とnsN4が重視する判断基準には差異が見られた。まず《相手の様子と反応の観察に基づいた判断》に関して、nsN3は非母語話者が自分の発話に対し、どう反応するかに関する[積極的な反応の有無]だけに言及したが、nsN4は[理解困難な様子の有無]、[緊張の有無]と[相手の理解度]に言及し、相手がどう反応するかだけでなく、相手がどう話すかにも注目していた。さらに、表2からnsN4は非母語話者が自分の発話に理解困難な様子を察して話すスピードを調整したり(例(1))、非母語話者の理解度を把握した上で、話し方を調整する必要があるかどうかを判断し

たり(例(6))したことが窺える。つまり、nsN4は非母語話者の会話時の様子や反応を観察することを通し、自己発話を調整する必要があるかどうかの判断をしていたと言える。次に、《相手発話の観察に基づいた判断》に関して、nsN3は[レスポンスの速さ]、[相槌の自然さ]、[ボキャブラリーの豊富さ]、[ボキャブラリーの難易度]といった円滑なコミュニケーション遂行に関する要素や語彙力に注目している。4.1で述べたように、[レスポンスの速さ]、[相槌の自然さ]は非母語話者がどう反応するかに関する内容であり、語彙力に注目したnsN3は話題の影響を受けた可能性が窺える。一方、nsN4は[短い文の量]、[発話の滑らかさ]、[発話前の考える時間の有無]、[標準語と方言の使い分け]に言及しており、自分の発話に対して非母語話者がどう反応するかではなく、どのように発話するかに重点を置いていると考えられる。

今回抽出された27個のコードの中に、文法・語彙の正確さや、日本語表現の自然さなどに関する内容は一つもなかった。逆に、NSN自身はどう感じたか、相手の様子はどうだったか、円滑なコミュニケーションが取れたかに関する内容が多かった。NSNは普段非母語話者と会話する機会が少なく、非母語話者とスムーズにコミュニケーションを取ることに慣れていない可能性がある。また、NSNは日本語教育の専門知識を持たないため、非母語話者の誤用や不自然な表現を日本語教師のように敏感に察知することが難しいと思われる。これらのことから、NSNは非母語話者が使用した文法・語彙の正確さ、日本語表現の自然さよりも、非母語話者の反応や会話時の様子、自身の会話時の感覚、会話全体のスムーズさなどに注目し、非母語話者の日本語レベルを判断していることが推測される。

6 まとめと今後の課題

以上、NSNは会話を通して非母語話者の日本語レベルをどのように判断しているかを探った。その結果、NSNは会話相手である非母語話者の発話や会話時の様子に向けられた【相手の観察に基づいた判断】、NSN自身の発話や発話時の感覚に向けられた【自己内省に基づいた判断】、会話全体のスムーズさに向けられた【会話全体を通じた判断】という三つの基準から非母語話者の日

本語レベルを判断していることが分かった。さらに、NSNにとって、まだスムーズに日本語で会話することができない非母語話者の日本語レベルを判断することは容易であるが、非母語話者の日本語レベルが上がると判断が難しくなることが分かった。その理由としては、日本語教育の専門知識を持たないNSNは非母語話者が使用した文法・語彙の正確さ、日本語表現の自然さ、非母語話者がどのように発話するかよりも、非母語話者の会話時の様子、自分の発話に対する反応、自身の会話時の感覚、自己発話のスムーズさ、会話全体のスムーズさなどに注目していることが挙げられるのではないだろうか。

本稿では、限られたデータではあるが接触経験が少ない母語話者が非母語話者の日本語レベルをどのように判断しているかを明らかにした。今後は、接触経験が多い母語話者、母語話者日本語教師の判断基準を明らかにし、三者の判断基準を比較したい。さらに、意識面の分析だけではなく接触経験が少ない母語話者、接触経験が多い母語話者、母語話者日本語教師と日本語レベルが異なる非母語話者との会話の特徴、母語話者が非母語話者の日本語レベルに応じて行う調整についても今後の課題としたい。

〈一橋大学大学院生〉

謝辞

データ収集にご協力くださった皆様に厚く御礼申し上げます。また、本稿執筆、修正にあたり、貴重なご意見、ご指摘をくださった指導教員の柳田直美先生、ゼミの皆様、ならびに査読者の皆様に心より御礼申し上げます。

注

- [注1] …… OPIでは「超級、上級、中級、初級」という四つの主要レベルがある。超級レベルと判定された非母語話者はネイティブに近い会話能力を持っているため、母語話者は言語的調整を行う必要がなくなる。そのため、超級学習者を今回の調査から外した。
- [注2] …… 一三三(1999)では、会話の目的の有無によって会話の進め方や言語面に違いがあるかを見るため、「好きな食べ物(目的がない)」と「日帰り旅行の計画(目的がある)」という二つの話題を設定した。

参考文献

- 小池真理 (1999) 「自由に語らせる調査面接法の有効性—学習者の会話能力に対する母語話者の評価の調査において」『北海道大学留学生センター紀要』3, pp.114-134. 北海道大学留学生センター
- 佐藤郁哉 (2008) 『質的データ分析法—原理・方法・実践』新曜社
- 筒井千絵 (2010) 「依頼の接触場面における母語話者の言語調整の特徴」『日本語／日本語教育研究』1, pp.49-65.
- 野原ゆかり (2016) 「外国人とのやりとりの経験は日本人の言語使用の意識を変えるか—中高年の日本人男性を対象に」宇佐美洋 (編) 『「評価」を持って街に出よう—「教えたこと・学んだことの評価」という発想を超えて』 pp.197-122. くろしお出版
- 原田明子 (2001) 「日本語レベルが異なる学習者に対し母語話者による評価に違いが見られるか」『群馬大学留学生センター論集』1, pp.51-58. 群馬大学留学生センター
- 一二三朋子 (1995) 「母国話話者と非母国話話者との会話における母国話話者の意識的配慮の検討」『教育心理学研究』43, pp.40-49. 日本教育心理学会
- 一二三朋子 (1999) 「非母国話話者との会話における母語話者の言語面と意識面との特徴及び両者の関連—日本語ボランティア教師の場合」『教育心理学研究』47, pp.490-500. 日本教育心理学会
- 村上かおり (1997) 「日本語母語話者の「意味交渉」に非母語話者との接触経験が及ぼす影響—母語話者と非母語話者とのインターアクションにおいて」『世界の日本語教育』7, pp.137-155. 国際交流基金
- 柳田直美 (2015) 『接触場面における母語話者のコミュニケーション方略—情報やりとり方略の学習に着目して』ココ出版
- 渡部倫子 (2002) 「日本語学習者との会話における日本人大学生の意識的配慮」『広島大学大学院教育学研究科紀要』2(51), pp.267-273. 広島大学大学院教育学研究科
- 渡部倫子 (2003) 「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価—評価尺度開発の試み」『広島大学大学院教育学研究科紀要』2(52), pp.175-183. 広島大学大学院教育学研究科
- 渡部倫子 (2004) 「日本語口頭運用能力の評価基準に対する日本語母語話者の意識調査—学習者との接触機会による相違」『広島大学日本語教育研究』14, pp.81-87. 広島大学
- 渡部倫子 (2005) 「日本語学習者の発話に対する日本語母語話者の評価—学習者のレベルによる相違」『大学教育研究紀要』1, pp.33-46. 岡山大学国際センター
- Eisenstein, M. (1983) Native Reactions to Non-Native Speech: A Review of Empirical Research. *Studies in Second Language Acquisition*, 5(2), pp.160-176. Cambridge: Cambridge University Press.